

新 知 見 あ れ こ れ (5)

奥 原 弘 人

H. Okuhara: Some new or noteworthy plants found in Nagano Prefecture (5)

1. アザミの雑種 A

1985年8月25日、松本市の武石峯と袴腰山の鞍部の道端にヨモギなどに混ってノアザミとダキバナンプアザミとの雑種とみられるものを見つけた。

1株から5本の茎を立て高さ70~80cmあるが、細く何となく弱々しく他に寄りかかるように立っていた。葉はノアザミの形に近く、頭花は直立し、総苞片は背面に粘着部のあるものも混り、上部は3~4cmほど伸びて開出している。

約2m離れてノアザミが1本立っていたが、それとは明らかに異なっている。この辺はダキバナンプアザミの多い所で、ここでも道路の反対側に多く見られ、勢よく花をつけていた。

以上の諸点から、これは上記2種の雑種と考えられるので、地名からこれをタケシアザミ *C. take-shiense* と呼ぶこととしたい。

2. アザミの雑種 B

1986年9月28日、楯誠治氏と木曽郡山口村の調査を行っていて同村神坂の疎林内でキセルアザミとスズカアザミの雑種とみられるものを見つけた。

細い山道を草を分けながら進んでいると、右にスズカアザミ、左に見えないアザミが同じくらいの高さで枝を交わして立っていた。附近を見渡すと左に2~3mはいった所にキセルアザミが50~60cmの高さで群がり、各々が1~2個の頭花をつけていた。

問題のアザミは多数の根出葉を勢よく広げて6本の茎を立て、その高さは1~1.2m、各々が6~8本に分枝し、先端に頭花をつけている。頭花はキセルアザミほどではないが点頭し、枝はキセルアザミより広い角度で分かれ長くのびている。茎葉は数個ずつついて何れも大きく、キセルアザミの根出葉に似ているが裂片は少ない。根出葉はキセルアザミのそれより幅広く浅~中裂している。

要するに頭花はキセルアザミに似ているが、分枝の数と角度、根出葉と茎葉の形などに大きな違いがあって、これはスズカアザミの影響によるものとみななければならない。全草が強勢で、いわゆる雑種強勢の姿を現しているものと考えられたので、両種の頭文字をとって和名をキスアザミ、学名を *C. × misa-kaense* としたい。

因に多くの文献にはスズカアザミには根出葉は残らないとあるが、これは環境によって異なり、草むらの中ではそうであるが、林縁などで大型草本のない所では明瞭に残っているのが常である。

3. セツブンソウの変りもの

長野県内のセツブンソウには次のような変りものがある。その第一はがく片が10~20枚と多数のもので、これは *f. plena* Ohara として記載されているものであろう。第二は花弁が白色のものである。セツブンソウでは花弁状のものはがく片で花弁は小さなY字状で先端はマッチ棒の先端のような形の蜜腺となっていて普通は黄色であるが、県内には純白色のものがあり、これはがく片の多数のものに多い。そこでこのがく片が多数で花弁が白色のものをシナノセツブンソウ var. *senanensis* と呼びたい。

次に葉が黄緑色で（普通は濃緑色）がく片が純白（文献には白色とあるが実際は微かに紅紫色を帯びる）雄ずい・雌ずいも純白（普通は濃紫色）のものがある。これこそ *f. albiflora* の名にふさわしいものであろう。

4. クルマアザミは forma か

クルマアザミについて牧野図鑑では、本品の葉状総苞の出現は一時的の変態現象で、毎年その株から一定して出て来ない。したがって一つの変種とは認め難い、として *C. tanakae* forma *obvallatum* 即ち品種としているが、これは適正であらうか。

一昨秋、北信の牟礼村で7~8本のクルマアザミのあるのを見て珍しかったので1株を持ち帰って自宅の庭に植えたところ、昨年は花を持たなかったが本年は3本の茎を立て、各々に2~4個の頭花をつけたが、この頭花は何れも正常のノハラアザミである。

これによってクルマアザミは一時的変態現象であることを知ったが、これを *forma* とすることに疑問がもたれる。むしろ一種の虫えいの現象ではないだろうか。

5. キバナシロタンポボを見る

1986年4月25日木曽郡山口村においてシロバナタンポボの黄花品を見つけた。20株くらいあるシロバナタンポボ群の中に1株だけ全形はシロバナタン

ポボそのものであるのに花色だけ黄色のものがあった。

新品種とみてキバナシロタンポボと記帳して帰ったが、後日杉本検索誌を見ると、既に北村博士によって記載されていることが分かったが珍しいものと思うので報告する。

6. チチブベンケイの1品種

南安曇郡奈川村の今は奈川渡ダムによって水没した所の奈川に沿った道路端に水没前小型のベンケイソウが点々と生えていた。葉腋に胎芽がついていたのでチチブベンケイなるものと考え自宅にも植えておいた。その胎芽から発芽したものが毎年何本かずつ庭で見られたが、近年注意して見ると葉腋のほか花序枝にも多数の胎芽のついているのが見られる。このような型のものは文献に見られないのでチチブベンケイの1品種としてナガワベンケイ *Sedum shimizuanum* forma *nagawaense* と呼ぶこととする。今もあの辺のどこかに残っているものと思う。

7. ツルアブラガヤが本県内に

1986年8月北アルプス山麓の木崎湖にツルアブラガヤの群生するのを見つけた。アブラガヤの稈に似た地上走出枝が2~3mに伸びて斜上し弓形に曲って先端が地について発根し、既に新苗を作っているのもあった。初見であったので、その壮大なのに驚き、帰宅して調べツルアブラガヤ *Scirpus radicans* Schk.と分かった。

別に高さ1m余でクロアブラガヤに似た大型の花序をもつ稈も僅か混っていたが、既にほとんど落果していた。ここでは湖畔に沿って2~3mの幅で広く群生している。

本種の産地は国内では北海道と山形、新潟両県であるが、広く北大陸に分布するとあるので北方系のものであろうから木崎湖は国内では分布の南限とみられる。

8. ハルナユキザサの分布

木曽の中部、日義・木曽福島・三岳・王滝・上松などの町村に大型のユキザサ属のあることは見ていたが、その観察を怠っていたところ、最近になってこれはハルナユキザサではないかと気付き奥山春季先生に標本の同定を願い、また自生地として知られる軽井沢を訪れ比較検討したが、やはり同種であることを知った。

また以前に採集した標本を調べていて次のようなことが分かった。王滝村の三浦ダムに流入する本谷・水無沢・土浦沢での採品も茎と葉で見る限りは同種

と見られるが、同地は岐阜県に近い標高1300mの地点である。また上松町南部で1968年5月29日に採集した3点の標本は葉が15~16枚と多いので1品種と認めキソユキザサ *S. j. var. robusta* forma *kisoensis* としたい。

なお山崎淳氏が南佐久郡の野辺山高原1300mでの採品も茎と葉で見てハルナユキザサと思われたので根茎を採集していただき本種と分かったが、古松隆明氏が下伊那郡の治部坂峠1300mでの採品も茎と葉では本種のように見られる。

文献によれば本種は群馬・栃木両県に分布し本県の軽井沢にも産するところがあるが、上記のように本県では広く分布するように思われるので注意したい。

なお本種の根茎の大きさ、葉の数についての記載は手元にある文献では見られないが、葉の数は11~12、根茎は珠数状で、その珠とみられる部分は直径3cmと大きく、本属中最も壮大である。

9. 暖帯植物の多い特別地帯

長野県の生坂村・坂北村にセッコクを多く産したことは土地の人でなくても知っていた。小諸市の周辺にヒメウラジロ・ミヤマウラジロのあることも、その道の研究者の間では知られていた。上田市・小諸市の千曲川左岸山地にヨコゲラノキの自生を見たのは大分前のことであるが、この種は県下では他では見られない。

十余年前坂井村の調査の折イワヒメワラビの群生を見、サルトリイバラも見したが、後者はその後麻績村・八坂村・大町市でも見、八坂村ではウメモドキの自生も見た。その頃麻績村ではコガネシダも見ている。近年坂北村の調査に当たりイワウメヅル・キンランを見、ヤマコウバシも何本か見、ヒメワラビも見た。

穂高町にオオクボシダのあるのを見たが、これは大町市にもあるという。大町市にはヤブコウジの群生地もあったがダムに水没し、移植したのがエネルギー博物館に残っている。

近年坂城町にイノデモドキ、戸倉町にセイタカシケシダ、更埴市にサイゴクイノデ、ホソバユウラビのあることを標本と報文で知った。

以上ここにあげた18種の植物は何れも暖帯植物である。そしてここにあげた地点は大体東の小諸市から西の大町市にわたる带状の地域であり県北部と中部を分ける地区でもあるが、この地域に何故暖帯植物が多いか興味ある問題である。